ゼンマイ仕掛ケノ人間達

神梛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼンマイ仕掛ケノ人間達

【Ｎコード】
Ｎ９５７９Ｘ

【作者名】
神棚

【あらすじ】
人間の魂には
一人一人ゼンマイがついている
「ゼンマイは人を表す」
「ゼンマイが止まれば人も止まる」
ゼンマイの見える？稀と
変わり者達の物語

一巻目　？稀

私は変わっているらしい
「変な奴だ」とよく言われる
自覚はしているのだが、
納得はできていない

だって
あの「ゼンマイ」が見えるのは
私だけだから

平凡な高等学校
平べったい毎日の一コマ

夏休みとやらの前日のこと
真夏の白い太陽の下で、
クーラーのない教室の中にぐっすり寝ている高2が一人・・・

「おい赤月！寝るな」
世界史の教師が怒鳴る
「うーん？」
（眠いんだから仕方ないでしょーが）
心の中で文句を言いつつも
のたのたと体を起こす。

彼女の名は
「赤月　？稀」
ユウキなどという男のような名前のせいなのだろうか？
炎天下の中ぐっすり寝られる図太い神経と、
荒っぽい性格を持っているゴーイングマイウェイな少女だ。
だが成績の総合得点では学年トップ5に毎回必ず入っている、何故だ
まぁ簡単に言うと
『性格は馬鹿だが脳みそはある』といった感じだ。

「いい加減にしろ全く」
「ほーいほい」
「単位減らすぞ」
2年に進級し早二ヶ月、先生方もそろそろ彼女（の扱い）に慣れて
きたようだった。
一方、
そんな人達のことも考えず
？稀は別なことを考えていた。

（今日の晩飯何にしようかな？）

呆れるしかない奴である。（ちなみに？稀は一人暮らしだ）

だが、周りの人間は知らない

彼女の瞳に映る「物」を
見えていないのだから
どんなに見たいと思っても

決して見られる物では

無いのだから・・・

一巻目　?:稀（後書き）

気まぐれ作品です
どうぞよろしくお願いします。ＷＷＷ

二巻目　変わり者

「あー帰りたくない」

学校の帰り道でそんなことを呟く?稀
そんな彼女の前をホコリがふわふわ通る
帰り道と言っても、自分の家のドアの前・・・・

鍵を取り出し、

鍵穴に差し込み

カチャと開けた
はずなのだが・・・
開いている

ハァとため息をつきドアノブを回し、

ドアを開けた途端

「ユウーーーーーーっ!!!」
というめちゃくちゃデッカイ声と共に、
少女が抱きついてきた。
首が絞まる
「杏・・・イタイ、放して、死ぬ」
杏と呼ばれた少女は「ありゃりゃゴメンゴメン」と首に巻きつけて

いた腕を解く

「鍵掛けてあったのになんで開けちゃうわけ？」
「そりゃあ開くから開けたんだよ」
「理由になってない」
どうしてそうなるんだ。
どうしてそう思うんだ。
「でもひどいよーあたしが家にいるって分かった途端に『帰りたくない』って言ってるし」
「何で聞こえてんの？」
「ハハハッ♪寒いだろうし上がりなよー」
「そこはあたしの家だ」

少女は
射済　杏
薄茶色のショートカットで大きな目が愛らしい
陸上部の部長で様々な大会に出ているスポーツ人間。
？稀と杏は小学生からずっと一緒で、
いわゆる幼なじみという関係だ。
天然で誰とでもなじめる性格の杏は、男子にもかなりモテモテなため・・・
敵が多い。

「そーいえばさー」
人の家で勝手にお茶を入れながら杏は話し始める。
「何？」
「また出たらしいよー」
「強盗？」
「違うよ『死神』の連中だよー何かやろうとしてるってー」
『死神』

その言葉に?稀は顔をしかめる。
「どっから聞いた?」
「えっへん!勿論『死神』の連中からだよー」
「要するに盗み聞きしたってことか」
杏の聴力は半端ではない
１００メートル先の内緒話もうるさいとのことで、
人混みにはなるべく入らないようにしているそうだ。
「で何かって?」
「それは言わずともよく分かってるでしょー」
「・・・うん」

『死神』というのは多分人ではない
人間を殺し、魂を取る・・・いや『狩る』
?稀と杏はその現場を見た。
大きなギロチンの刃を持った少女と、
人間の魂を見た。
いびつな深紅の塊だった。
そのとき?稀は気がついた
魂に小さなゼンマイがついているのを・・・

『死神』はそれを持つと
こちらを見て
「あら、こんにちは私死神と申します」
そう一言だけいうと
霧のように消えていったのだった。

それからだった、？稀は日常で魂がみられるようになった。
ゼンマイ仕掛けの魂がみられるようになってしまった。

杏はそんなこと無いらしいが耳が異常なまでに良くなったそうだ
しかし、ゼンマイの話を杏に話しても
「そんなの無かったよ、魂ってきれいなまん丸だったもん」と言う。

だが、二人して「変わり者」になってしまったというのは事実であった。

二巻目　変わり者（後書き）

うへー
べたべたですな。
あと、
キャラの名前は
アカツキ　ユウキ
と、
イズミ　アンズ
です。

平和の終わり（？）

「死ね」
そう言って黒い死神は
大剣を・・・

「杏、そろそろ帰んなよ」
一瞬静かになった部屋に?稀の声が響く
杏は
「えーじゃあ寂しいしユウ一緒についてきてよー」
文句をぶつぶつ言って
口を尖らせる杏
「何でだよ」
「いーじゃん別に」
と?稀の腕を引っ張る
「ヒマでしょ?」
「・・・」
そう言われると・・・
ヒマだ
「分かったよ」
毎度結局折れてしまう。
あーあ甘いなぁー

・・・と、いうことがあり
?稀は杏の付き添いをすることになった。
杏の家はメッチャ近いが・・・

しばらく、歩いたとき声がかかった

「あっお姉ちゃん！？稀ちゃん」
「雪奈？なんでここにいるの？」
声の主は杏の妹、雪奈だった。

杏には双子の妹がいる
姉は相梨
妹は雪奈という。
二人とも姉に似て運動神経がメチャクチャ良い。
（そして喧嘩っ早い）

「いや、相梨と喧嘩してさー家に入れてくれないんだよね」
「やっぱりか」
呆れ顔の杏
これはある意味夏の風物詩である。
「あんた達兄弟はいつまで経っても変わんないね」
「そうかな？」
ハモる二人
「それはそうとお姉ちゃん鍵持ってるでしょ？」
「・・・」
「お姉ちゃん？」
「・・・なくしたらしいねこのアホは」
ニヤっと笑う？稀
「もー頼れないんだから、先いってるよ」
そう言って駆け出す雪奈

ゾワッと嫌な予感がした
寒気と言うより悪寒がしたという感覚だ。
それを感じた途端、？稀は自然と叫んでいた。
「雪奈っ！走れ！」
「？」

何を言っているんだ？とでも言いたそうな顔で雪奈が振り返る。
「ユウ？どうしてそんなこと・・・」
杏もけげんな顔した・・・その時

ガリ・・・と地面を削るような音が聞こえ
振り返った雪奈の後ろに漆黒の影がスッと現れた。
？稀の顔が青くなる
杏は・・・・いなかった、いや、目にも留まらぬ早さで走っている。
妹の元へ
そして雪奈の腕を引っ張って駆け出した。
雪奈も杏の腕を強く握る。
だが、影も速かった
あっという間に杏に追いついてきた
「っ！お姉ちゃん！」
雪奈が叫んで姉の手を放す。
「雪奈！？」
雪奈はそこから飛び退いて地面に転がる・・・・そして
ガインッ
と地面に何かが当たる音
そのとき
？稀の目がとらえたのは・・・
黒いマントを身につけた大男だった
手には大きな剣を持っている。
男は？稀を見て笑った、そして・・・
「お前達には俺が見えるのか」
と言葉を発すると
雪奈に向けて
こう言った

「俺は死神、ということで」
「死ね」

平和の終わり（？）（後書き）

イミフメイ
しばらく更新できないかもぞよ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9579x/

ゼンマイ仕掛ケノ人間達

2011年11月14日11時48分発行